# 朝鮮史料でみる日本史

## ―申叔舟撰『海東諸国紀』を中心に―

七里ガ浜高校　中田　稔

### はじめに

日本史学習に有用な資料（史料）が日本国内にのみ存在するとは限らない。本報告は、近年「海域アジア世界」というグローバルな観点で研究が進む中世の対外関係がテーマである。従来、このテーマで教材に用いられてきた外国史料の定番は、絵画資料である『倭寇図巻』、室町時代に畿内で三毛作が行われていた記述を含む宋希璟『老松堂日本行録』（応永の外寇の翌年、日本事情探索を兼ね訪日した朝鮮使節宋希　の見聞記で、外国人による初の日本旅行記。参考文献A）があった。報告者は、授業での利用も可能な資料として申叔舟『海東諸国紀』を紹介したい。

『海東諸国紀』は中世日朝関係研究の基本史料という評価が定着している（参考文献B）。韓国では、すでに国定「国史」教科書（著者は国史編纂委員会）でとりあげられている『海東諸国紀』だが、ようやく日本でも注目されつつある。すなわち、現行学習指導要領の特色である「歴史の考察」に基づいて「外国人が見た日本」という項目を設定し、本文中で軽く紹介する教科書や、室町時代の対外関係の単元で所収の地図を掲載する教科書が現れ、昨年は入試問題でも取り上げられた。

### 一　撰者・申叔舟と『海東諸国紀』

申叔舟は一四一七年（応永二四・太宗一七）の生まれ。一四三九年（永享一一・世宗二一）に文科に及第し、先述のように一四四三年（嘉吉三・世宗二五）の日本通信使に書状官として来日を果たし、室町幕府七代将軍義勝と謁見した。その帰途に立ち寄った対馬では、島主宗貞盛が別の朝鮮使節である李藝と（対馬から派遣する）貿易船の総数を制限する癸亥約条（嘉吉条約）締結の交渉中であった。貿易船の総数に枠をはめることは、朝鮮貿易の利権を確保しておきたい対馬島主宗氏にとって死活問題なので、貞盛は締結をしぶっていたようだが、京都からの帰途立ち寄った申叔舟が貞盛を説得し、締結に至ったようだ。彼はまた、朝鮮王朝四代国王世宗が訓民正音（ハングル）を制定する際には遼東の音韻学者との間を往復し、これを助けた。五代国王文宗即位に際しては、（宗主国明に対する）謝恩使の書状官として一四五二年（享徳元・文宗二。明は景泰三）に北京に派遣される一方、一四六〇年（長禄三・世祖五）には咸吉道（のちの咸鏡道。現在は北朝鮮の東北部）都体察使（現場での兵馬の統率を全権委任された司令官）として北方女真族の部族抗争を和解させるために会寧に赴き（この時は女真語で和解勧告文を記したという）、さらに兵を率いてこれを攻略した。

このように、申叔舟は朝鮮王朝初期において、「日本」「明」「女真」といった、朝鮮からみた周縁地域すべてを実際に見聞した唯一の高官だった。一四六二年（寛正三・世祖八）には領議政（日本の首相に相当）となり、さらに世祖～睿宗～成宗の三代の国王に仕え、『海東諸国紀』の撰修が成った一四七一年（文明四・成宗二）には、再び領議政となった。申叔舟は一四七五年（文明七・成宗六）、五

九歳で没したが、最期に「願わくば王（引用者註＝成宗のこと）、日本との和を失う勿れ」という言葉を遺し、また朝鮮王朝七代国王である世祖は「卿（引用者註＝申叔舟のこと）は是、我の魏徵なり」と、唐代太宗の名臣魏徵を引き合いに出して賛美していたという。

中国諸王朝に対する「事大」と、北方の女真族・南方の日本との関係は、高麗から朝鮮王朝にかけて常に重大関心事であった。

『海東諸国紀』は申叔舟の没後も増補が行われている。現在は岩波文庫に入っている（参考文献C）。以下、その内容を列記する。

○序文

○地図一〇葉

「海東諸国総図」

「日本本国之図」（東西一葉ずつ）

「日本国西海道九州之図」

「日本国一岐島之図」

「日本国對馬島之図」

「琉球国之図」

「熊川薺浦之図」「東萊富山浦之図」「蔚山塩浦之図」

○本文

「日本国記」

「琉球国記」

「朝聘応接記」

○補足…一五〇一年（文亀元・燕山君七）李季仝によるもの

「琉球国」

紙幅の関係もあるので、本報告では「当時の朝鮮王朝に伝わっていた日本情報」「日本列島と朝鮮半島の間の海域世界の状況」の二つの事がらに絞って興味深い資料を抜き出し、紹介したい。

## 二　『海東諸国紀』の日本情報　偽使と応仁文明の乱

朝鮮王朝にとって、対日関係における最も重大な関心事は倭寇の禁圧と懐柔であった。一五世紀前半段階で室町幕府将軍にそのような力がないことを知った朝鮮王朝（先述の宋希　に同行した訳官尹仁甫の復命に明記されている）は、各地の守護大名や国人を頼り、通信使や回礼使といった使節を日本に派遣するたびに、少弐や大友・大内といった守護大名への挨拶と方物（みやげ）を欠かさなかった。『海東諸国紀』には、そのような守護大名をはじめ日本列島各地から朝鮮王朝への通交をおこなった諸勢力を国（日本の旧国名）ごとに列挙している。

例えば、「日本国記」「山城国」の「伊勢守」は、次のように紹介されている（原漢文。書き下しおよび注は参考文献Cによった）。

**【史料】**

**伊勢守**

政親（このような人物は実在せず。貞親のことか）。文明二年庚寅（一四七〇年）、遣使来朝す。書に、国王懐守（かいしゅ。養育係）納政所伊勢守政親と称す。其の書の略に曰く「細川と山名は私に干戈（かんか。いくさ）を起こし、京城（みやこ）大いに乱る。余、停止を為すも、而も未だ止まらず。両人の罪少なからず。扶桑殿の下命により諸侯の諸軍を集め、将に太平を収めんとす。大国の

餘力を蒙り（朝鮮国の力を得て、の意）、綿紬（めんちゅう。繭糸で織ったつむぎ）・綿布（木綿の布。木綿は朝鮮の慶尚道・全羅道・忠清道で産出）・苧布（苧麻。からむしの布）・米を所望せんと欲す」と。其の所進の方物（みやげ）亦豊かなり。且、政親は国王近侍の長為（た）り。庶政を出納する者なり。特に綿布・正布（麻布）各千匹・米五百石を給し、以て軍需を助け、国王に転達せしむ。又政親に別に回賜あり。その使は巨酋使（きょしゅうし。守護大名クラスからの使節団のこと）の例を以て館待（客館において接待すること）す。

かつて有光友學氏は、この「伊勢守」を含む『海東諸国紀』「日本国記」に登場する一七四名の通交者を「地域別」「通交名目別」「階層別」に分類し、考察した（参考文献D）。しかし、長節子氏によるそれらの使節のかなりの部分が偽使であった、とする衝撃的な指摘（参考文献E）を受け、佐伯弘次氏らのグループは『海東諸国紀』記事と国内史料のすり合わせを行い、さらに偽使が増える可能性があることに言及した（参考文献F）。偽使とは名目上の派遣主体と実質的なそれが合致しない使節を指し、最近の日朝関係史研究における主要テーマであった。現在では、派遣主体としては対朝鮮通交の管理を朝鮮王朝から委任されていた対馬島主宗氏と琉球貿易を押さえていた博多商人のラインが偽使創出の主体として有力視されており（参考文献G）、癸亥約条によって朝鮮貿易を制限された一五世紀半ば以降に減少した貿易量を補うために偽使が増加したという理解が定着しつつある（参考文献H）。例えば、対馬島主が「日本国王使」名義の使節を派遣し、国書を偽造して通交することができれば、対馬島主は「日本国王使」という格に応じて下される多量の回賜品を手に入れ、貿易量の減少を補うことができる、というわけである。

ここに登場する「伊勢政親」が架空の人物であることが確定したわけではないが、その可能性は否定できない。そうだとすればここに記されている情報は、対馬の宗氏か博多商人からのものである可能性が強いが、伊勢氏が「国王懐守納政所」であったことは確かなようなので、この（一四七一年の）時点で進行中であった応仁文明の乱のことも含め、伝わった情報はかなり正確であったようだ。

## 三　『海東諸国紀』所収の地図からわかる日朝海域の航路

『海東諸国紀』には、視覚的に日朝関係を理解できる一〇枚の地図がある。先行研究（参考文献I）によれば、一三九七年（応永四・太祖六）に大内義弘の来聘に対する回礼使として来日し、長期滞在の末一三九九年（応永六・定宗元）に帰国した朴惇之が持ち帰った日本地図がそのルーツであるという。この地図は一四二〇年に礼曹判書の許稠に寄贈されたが、壱岐と対馬が欠けていたようだ。壱岐と対馬については、特に地名の記載が詳細で、しかも朝鮮音で当て字が行われているところから、一四二〇年以降すなわち一四四三年に申叔舟自身が来日して得た知識に、その後朝鮮に渡った日本人の情報を加えて加筆されたと考えられている（参考文献J）。琉球国の部分は、一四五三年（享徳二・端宗元）に「琉球国中山王尚金副」の使者を称した博多商人道安が持参した地図が素材になったという。

次ページの下段は、一〇葉ある地図の中の「海東諸国総図」であ

る。左上角に顔を出しているのは朝鮮半島の南東部で、「蔚山郡塩浦」「東萊県　富山浦」「熊川県　乃而浦」の文字が見える。言うまでもなく、倭人の居住が認められた「三浦」である。

地図全体の特徴としては、次の三点を押さえたい。

まず、壱岐と対馬が実際より大きく描かれている。図中、ほぼ長方形に描かれた九州と、朝鮮半島との間に描かれているこの二つの島を、朝鮮王朝では倭寇の根拠地と考えていて、そのような関心の高さが、このような扱いの背景にあることは容易に想像できる。

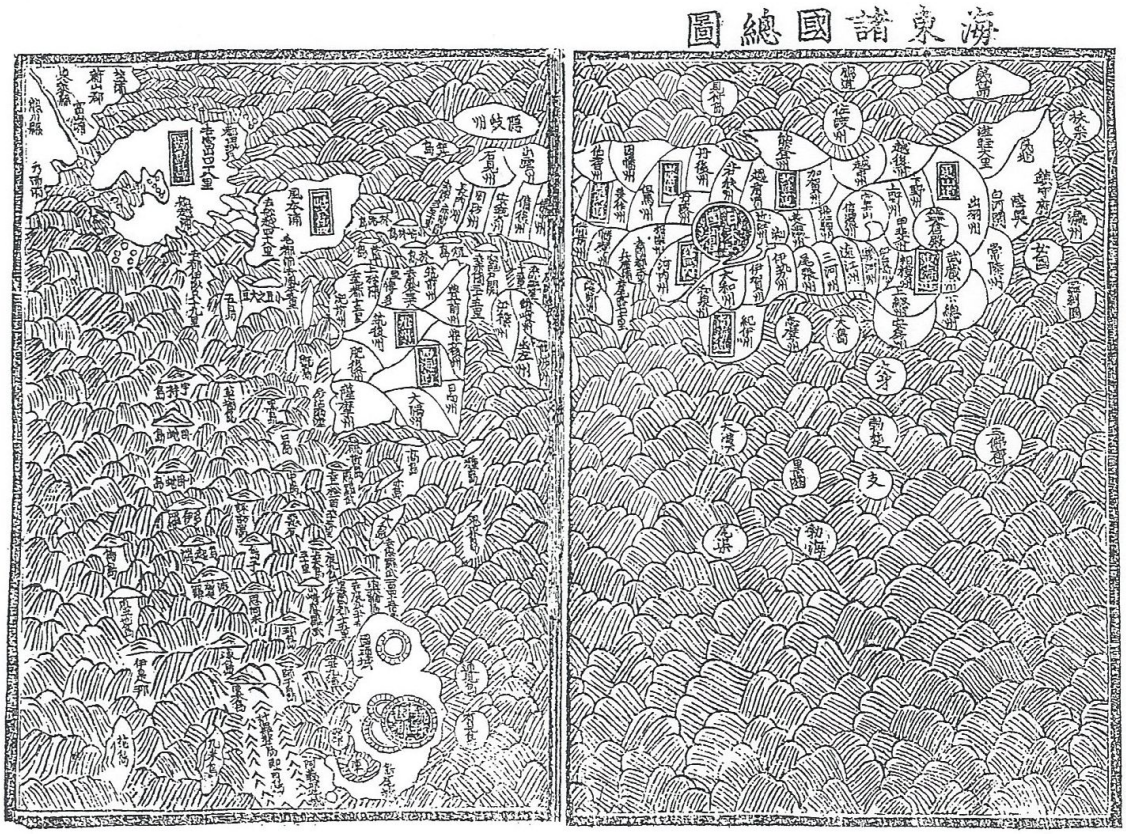
次に、九州から沖縄にかけての正確さである。この「海東諸国総図」とは別にある「琉球国之図」と「日本国西海道九州之図」を見ると、九州から沖縄にかけて見られる南西諸島の島々が、ほぼ漏れなく登場する。琉球貿易を行っていた博多商人である道安が持ち込んだ琉球地図が元になっているといわれる所以である。道安も、これらの島々を目印として航海を行っていたのであろう。「琉球国之図」が現存最古の沖縄地図であることも付記する。

さらに、地図のほぼ右上角にある「夷島」に注目したい。これは「えぞがしま」と読み、現在の北海道と考えるのが通説である。この地図は日本列島の一部として北海道を組み入れた最初の地図である、ということが三点目の特徴である。

「海東諸国総図」以外の六枚の日本図には、海面部分に白い筋が引かれている。これは当時の航路を示すもので、かなり正確に描かれているようである（参考文献J）。

現在用いられる日本地図に、『海東諸国紀』の六枚の日本図中の主な地名および各々の地図に記される航路を書き入れたものが、9ページ略地図である。この図を見ると、瀬戸内から近畿にかけての地域に朝鮮王朝が関心を持っていたらしい（航路が近畿で途切れることや、沖縄本島が博多商人の活動範囲の南限である（沖縄本島以南の航路はない）ことなどが想像できる。

【図１】「海東諸国総図」（申叔舟『海東諸国紀』、東京大学史料編纂所所蔵より）



「日本国對馬島之図」を見ると、まずほぼ北端の鰐浦から富山浦および塩浦に向けての航路を読み取ることができる。乃而浦からは、浅茅湾に向けての航路があり、同じ浅茅湾の奥から壱岐・博多に向けての航路が目立つ。対馬をほぼ南北に分断する浅茅湾の西の入り口である尾崎と、東の小船越を押さえていたのは、海の豪商早田（そうだ）氏であった（参考文献K）。乃而浦～浅茅湾～壱岐～博多のルートが、当時の日朝間の主要交易ルートだったのであろうか。この頃宗貞盛は、その本拠を東岸中部の佐賀（さか）から現在の中心地厳原に移すところであった。

「日本国西海道九州之図」からは、博多以外の要港として上松浦と坊津の存在が大きかったことがわかる。「日本国之図」の西日本版を見ると、当時の瀬戸内航路の要所は、赤間関（下関）のほか、西から竈戸関（上関）・尾路（尾道）・兵庫津があった。

次ページ略地図には、これらをすべて書き込んだつもりである。さて、この地図に示された航路・海域を往来したのはどのような人々なのだろうか。朝鮮王朝の正史である「朝鮮王朝実録」からかるいくつかのパターンを挙げてみたい。

まず、室町幕府将軍による「日本国王使」、守護大名や対馬島主宗氏からの使節等、（おびただしい偽使も含めた）日本列島側からの使節が挙げられる。

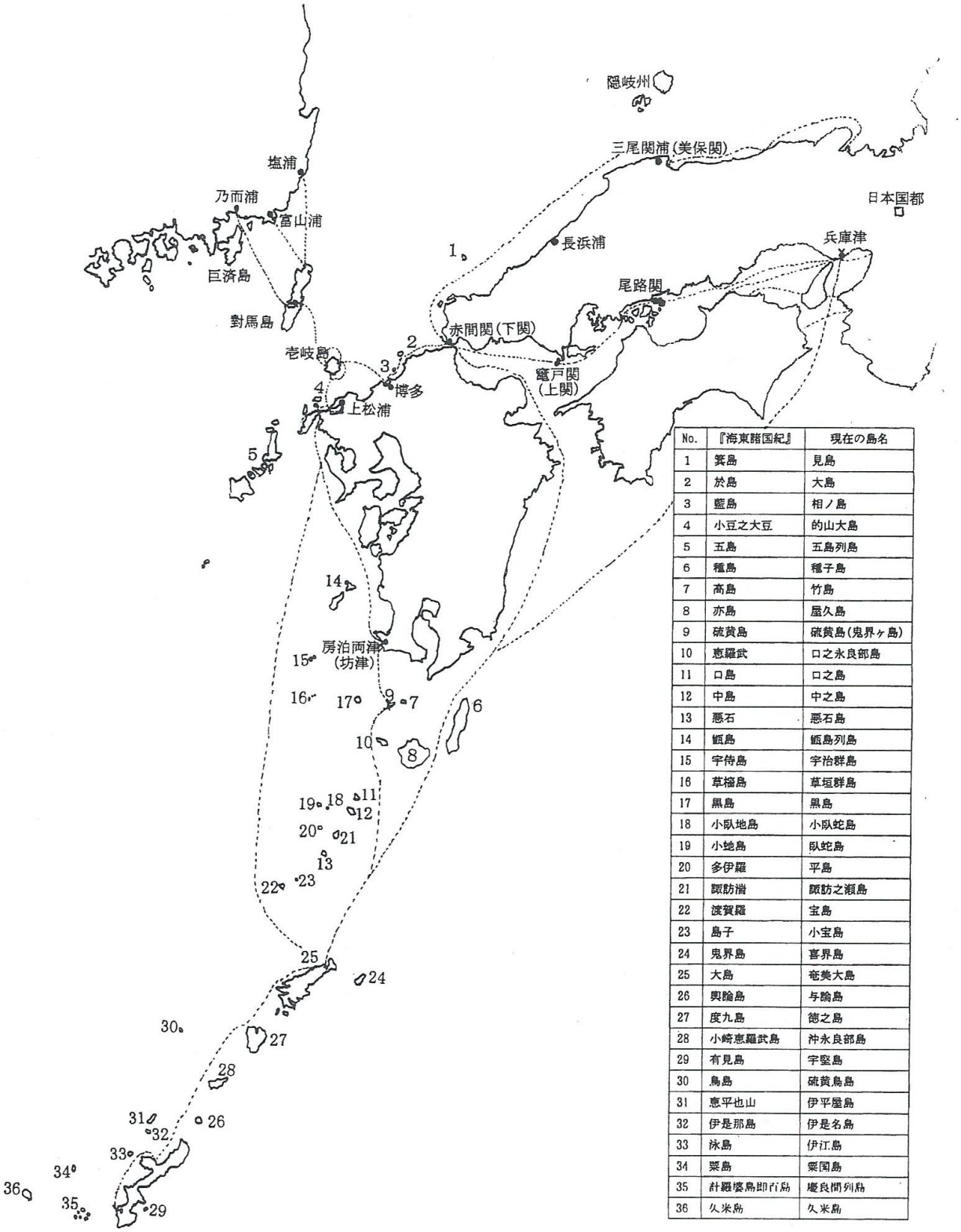
次に、朝鮮王朝から日本に差し向けられた使節である。例えば、冒頭でも触れた李藝は、一四〇〇年（応永七・定宗二）から毎年のように日本に渡航しては倭寇に連行された朝鮮人を探索し、帰国させた。一四一六年（応永二三・太宗一六）には琉球に渡航し、奴隷として琉球に売られた朝鮮人四〇人余りを連れ帰っている。一四二〇年（応永二七・世宗二）からは通信使・回礼使など使節として数回京都を往復した。この間、山陰地方（石見国長浜）に漂着したり、瀬戸内で密貿易中に海賊に襲われるなど実に多彩な経験をしている。一四四五年（文安二・世宗二七）に没した際の記事には「凡そ、倭国に奉使すること四十余行」とあり、生涯を対日外交にささげたことが高く評価されている。一五世紀前半における屈指の日本通である李藝は、次ページ航路の大半を知っていたであろう（参考文献L）。

日本人なのか朝鮮人なのか判断に困る人物も登場する。

例えば「王朝実録」に数回登場する金源珍なる人物は、生まれは朝鮮であるが、肥前松浦党の使者として薩摩の島津氏から預かった（倭寇による捕虜の）朝鮮人を送還したり、松浦党の豪族が乗船する船の材木伐採を朝鮮で行うための依頼に出向いたりと、九州の諸勢力との面識を読み取ることができる。朝鮮に「女」（娘？配偶者？）を持ち、琉球には「孫女」がいるという記載もあるので、東シナ海域を活動エリアにしていたことは間違いない。出生地主義をとれば朝鮮人だが、「王朝実録」の記載は「倭人」である（参考文献M）。「王朝実録」にはこのような「倭人」が複数登場する。

金源珍等の例からわかることは、倭人と日本人はイコールではない、ということである。彼らの活動した、点線が行き交う海域は昨今よく言われる「国境を超える地域」であり、彼らの「国籍」を今日の感覚で割り切ってはいけない。いわゆる「境界人（マージナルマン）」（参考文献N）であった彼らの活動舞台は、（日本でも朝鮮でもなく）日・明・朝鮮といった国々からある程度独立した海域アジア世界のうちのひとつであった、というのが昨今の日本の研究者の常識的な見解なのである。

【図２】『海東諸国紀』に記された日朝海域の航路




| No. | 『海東諸国紀』 | 現在の島名 |
|---|---|---|
| 1 | 箕島 | 見島 |
| 2 | 於島 | 大島 |
| 3 | 藍島 | 相ノ島 |
| 4 | 小豆之大豆 | 的山大島 |
| 5 | 五島 | 五島列島 |
| 6 | 稚島 | 種子島 |
| 7 | 高島 | 竹島 |
| 8 | 亦島 | 屋久島 |
| 9 | 硫黄島 | 硫黄島(鬼界ヶ島) |
| 10 | 恵羅武 | 口之永良部島 |
| 11 | 口島 | 口之島 |
| 12 | 中島 | 中之島 |
| 13 | 悪石 | 悪石島 |
| 14 | 甑島 | 甑島列島 |
| 15 | 宇侍島 | 宇治群島 |
| 16 | 草榴島 | 草垣群島 |
| 17 | 黒島 | 黒島 |
| 18 | 小臥地島 | 小臥蛇島 |
| 19 | 小蛇島 | 臥蛇島 |
| 20 | 多伊羅 | 平島 |
| 21 | 諏訪淵 | 諏訪之瀬島 |
| 22 | 渡賀羅 | 宝島 |
| 23 | 島子 | 小宝島 |
| 24 | 鬼界島 | 喜界島 |
| 25 | 大島 | 奄美大島 |
| 26 | 與論島 | 与論島 |
| 27 | 度九島 | 徳之島 |
| 28 | 小崎恵羅武島 | 沖永良部島 |
| 29 | 有見島 | 宇堅島 |
| 30 | 鳥島 | 硫黄鳥島 |
| 31 | 恵平也山 | 伊平屋島 |
| 32 | 伊是那島 | 伊是名島 |
| 33 | 泳島 | 伊江島 |
| 34 | 粟島 | 粟国島 |
| 35 | 計羅婆島即百島 | 慶良間列島 |
| 36 | 久米島 | 久米島 |

## おわりに

『海東諸国紀』は、朝鮮王朝の正史である歴代『朝鮮王朝実録』とならび、中世日朝関係史を研究する際の基本文献である。中世の日朝関係のとらえ方が大きく変わりつつある現在においても、その価値はいささかも減じていない。

特に一〇葉の地図に記された要津や航路は、当時の海域における交流を想像させるに十分であるし、「日本国記」「琉球国記」といった文字史料は、当時の朝鮮王朝の日本認識を探る上で貴重なデータを与えてくれる。

生徒が〈室町時代〉をグローバルに把握する上でも、これ以上の教材は見あたらない、と報告者は考えるがいかがだろうか。

朝鮮半島は日本列島に隣接するがゆえに、日本史をグローバルにとらえるという視点で読むと有効な史料がまだ存在する。機会を改めて報告したいとおもう。

**《参考文献》**


宋希璟・村井章介校注『老松堂日本行録』　岩波書店　一九八七

関　周一「日朝多元関係の展開」、桃木至朗編
『海域アジア史研究入門』　岩波書店　二〇〇八

申叔舟・田中健夫訳注『海東諸国紀』　岩波書店　一九九一

有光友學「中世後期における貿易商人の動向」、
『静岡大学人文学部人文論集』二一　一九七〇

長　節子「朝鮮前期朝日関係の虚像と実像」、
『年報朝鮮學』八　二〇〇二

佐伯弘次他「『海東諸国紀』日本人通交者の個別的検討」、
九州大学二一世紀ＣＯＥプログラム（人文科学）
『東アジアと日本―交流と変容』第三号　二〇〇六

橋本　雄『中世日本の国際関係』、吉川弘文館　二〇〇五

荒木和憲『中世対馬宗氏両国と朝鮮』、山川出版社　二〇〇七

中村栄孝「『海東諸国紀』の撰修と印刷」、
同　『日鮮関係史の研究（上）』　一九六五

佐伯弘次「『海東諸国紀』の日本・琉球図と『琉球国図』」、
『九州史学』第一四四号　二〇〇六

佐伯弘次『街道の日本史四九 壱岐対馬と松浦半島』吉川弘文館
二〇〇五

中田　稔「朝鮮王朝初期における日朝関係史上の朝鮮官人を追って」本分科会『歴史分科会研究報告』第三四号
二〇〇五

田中健夫『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会　一九五九

村井章介『アジアの中の中世日本』校倉書房　一九八八

同　『中世倭人伝』、岩波書店　一九九三